

レムブラント時代とその社會經濟的背景(一)

村松恒一郎

- 一 レムブラント時代
- 二 問題性の考察、オランダ文化と西歐文化の性格的相違
- 三 十七世紀のオランダ經濟

「シェークスピアのイングランド」、「ゲーテの時代」、このような言葉から、人々はある特色によって内面的に統一された文化現象の全體的印象をうける。いやそれ以上に、後代の人々が一種の憧憬れの感情を以て見返るようなもの、後代には既に失われた青春の活力、後代が僅かにその餘映を仰ぐような新しい指導價值が、突然

レムブラント時代とその社會經濟的背景(一)

に國民の中に芽生え、成長し、彼等の月並な傳統的生活、その動脈硬化的生活力を一新する時代、いわば歴史的な最良の時代を想い浮べる。丁度、それと同じような意味で、「レムブラント時代」という言葉が、オランダの歴史家達によって使われる。一九五六年は、畫家レムブラント(一六〇六年—一六六九年)の生誕三百五十年に當っており、知られるように世界各地でその記念の催がとり行われたのである。その當時スペインの屬領であったネーデルランドが本國に反旗をひるがえしたのが一五六八年、北部ネーデルランド七州が、その間スペインに歸伏した南部十州と袂を別って、新たにウトレヒト同盟を結び、

獨立を宣言するのが一五七九年から八一年のこと、その後一六四八年のミュンスターの講和條約によって、始めて、列強から公然その獨立が承認されるわけであるが、實は一六〇九年、スペインが新共和國との間に十二年間の休戦を約束せざるを得なくなった頃には、オランダの事實上の獨立はほど達成されたと見てよかつたのである。即ちレムブラントは新興の共和國とほど時を同くしてこの世に生れたわけである。レムブラントの成長期はまた共和國の成長期で、レムブラントがその畫名をほしいままにする十七世紀の三、四十年代には、新生共和國もまたヨーロッパ一流の富強國としての地位を早くも築き上げる。彼が生活し活動をするアムステルダムは世界の中心市場であり、暇なくそこに入出するオランダ商船隊は、ヨーロッパ諸國間の唯一の中介商業者として、また海上運送業者として、北は東海、白海、南は地中海の果ての果てまでその輝かしい國旗をひるがえすばかりでなく、スペイン、ポルトガルの落勢に乗じて、東洋や新大陸の商業路、植民地にも進出して、世界の海上權を急速にその掌中に納めた。強大なスペインの壓力に抵抗

し、ドイツやバルチック諸邦の紛争に於ても、その政治的軍事的實力を證明して、今や共和國は、イギリス、フランス等次代のヨーロッパの主導國に伍して、押しも押されぬ列強の一つとして、ヨーロッパの一時の形勢を主導する地位を獲得する。イギリスもフランスも次第にこの小國に對して羨望と嫉視の交つた白眼を向け、もともとその獨立に好意と助力を與えた兩國の國民の間に、何時の間にか力強い反感と、根強いオランダ嫌いの感情が湧き上る。レムブラントが漸く後半生の波瀾多い苦境時代に入る頃から、共和國もまた試煉の多い時代に入るのである。エリザベスの下に兵を送つてその獨立に肩を入れた英國は、既にジェームス一世の治下、オランダの商業に、またその海上勢力の基盤と見られたオランダの漁業に打撃を與えるために、種々の劃策を行い、遂に一六五一年クロムウェルの航海條令の發布によって、オランダの海上の覇權に對するイギリスの反撃、攻撃が公然と開始される。第一次・第二次の英蘭戦争（一六五二年—五四年、及び一六六四年—六七年）に於けるその必死の抵抗にもかかわらず、オランダはその海上覇權への致命

的打撃と考えられたこの條令の撤廢に成功しないばかりでなく、昨日まで威風を誇ったオランダ船が、英國領海に於ては、英國船の國旗に敬禮を餘儀なくされるというような屈服を餘儀なくされ、更には戰爭の間に南米の植民地はポルトガルに奪回され、北米のそれ、ニュー・アムステルダムはイギリスの手に落ちて、その世界に於ける海上權が漸く動搖し始める。フランスはスペインに對する對抗者としての地位から常にオランダの獨立には同情的で、繰返す同盟によってこれを援助してきた。又イギリスと異り、フランスはもともと内陸國であつて、海上に於てオランダと競争する地位にあるわけではないが、オランダの急激な擡頭は、ここでも自ずからに羨望や嫉視の念を生み出す。既にリシュリユーもこれを抑えようとする意を抱いていたが、ルイ十四世の治世になると、一方では、フランスが南ネーデルランドに對してもつ領土的野心に、オランダが斷乎として反對を示す事情、他方では、コルベールの佛國商業及び航海業の建設計劃を進めるためには、先ずフランスをオランダ商業の支配から解放するのがその第一歩であつた事情から、兩

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

者の關係も自ずから緊張してくる。先づ一六六七年以來の關稅戰爭に於て、コルベールの高率輸入關稅によるオランダ商業排斥が、オランダに大きな苦痛と打撃を與え、次で一六七二年から七八年に及ぶ所謂オランダ侵略戰爭の間に、オランダは直接の商業上の打撃を受けるばかりでなく、就中その間漁夫の利を追う競争者イギリスの海上商業上の大きな進出によって、今やその主導的地位は漸くゆらぎ、海上の霸權がイギリスの奪うところとなる形勢が次第に濃厚となる。そして十八世紀と共に始まるスペイン承繼戰爭は最後にこの地位交替を確立不動のものとしてしまうのである。十七世紀の六十年代、七十年代のオランダがこうして受けた打撃や損害も、一見まだその死命を制するほどではなく、その國運隆盛の勢は猶抑うべくもないようにも見えるのであるが、實はオランダの成長力がこの時期に頭を打ち、ヨーロッパに於ける中心的地位が共和國を去るといふ大勢的變化が丁度この時期に起つたことは疑いようがない。オランダの經濟力、従つてまたその全體的國力の衰退の始まりを、早くも五十年代の始めに、即ちイギリスの航海條令の發布

の時に見る意見は、その後の波瀾苦境の間にも獨立の成長を續けようとするこの國民の努力の跡を見失うであらうし、またこれを十八世紀の三十年代、オランダの工業が決定的衰退の徴候を見せる時期にまで延ばす意見は、この國民の本來の發展力とその餘勢的な力とを識別しないものといふことが出来る。こう見ると、共和國の最良の時代は、レムブラントの生涯と前後して終るといふことが出来る。事實それはオランダの最良の時代であった。興國の意氣に燃える國民の中から、政治經濟軍事の方向に於てばかりでなく、精神文化の領域に於ても、オランダ史を飾る偉大な代表者達が、この一時期にこぞって輩出する。スピノーザやグロチウスはそのような學問的代表者であったし、建國記念に建てられたライデン大學は近代科學の淵藪となる。レムブラントやハルスヤ、ルイスデールやフェルメールやその他數々のオランダ派の畫家達、フォンデルを遙かに高い頂として、その麓に居流れるブレデローやコンスタンティン・ホイヘンスヤ、ホーフト等のオランダ詩壇、オランダ文化の華がこの一時に咲き揃う觀がある。レムブラントの時代はまさに、

他の學者が同じ時代に冠する言葉に従えば、「オランダの黄金時代」であったのである。

勿論そのような言葉によって人々に傳わるものは、極めて漠然とした曖昧な文化時代の一般的印象以上のものではない。殊にその外面的傳統を承け繼ぎ、その内面的意味を知らず識らずの中に體得することの出来るオランダ國民以外の、他の國民にとっては猶更である。吾々が以下に試みるのは、このオランダの一文化時代の一般的印象を、それが盛られた容器である當時のオランダ國民の諸生活事情、その經濟や政治や一般にその社會的歴史的な條件の規定に相應するような形で、出来るだけ賦型して見ることに、そのようにして一應その中心的な意味の所在をつきとめ、その性格的特色を明らかにして見ようとの一つの試みである。そのような準備が出来た上で、始めて、レムブラント時代というような名稱が、どれだけその時代を云い現わすのに適當であるか否かも、恐らく判断し得ることであろう。

十六世紀のヨーロッパの形勢を大観すると、強大なスペインの勢力が先づ眼につく。それは、前世紀の末新たに統合された許りの國民國家と、舊い傳統を背負うドイツ帝國を結びつけた巨人國であり、近代文化の精神的原動力であった文藝復興、宗教改革の發祥地イタリアとドイツを併せてその手に保ち、その上に、眞に近代的な事件であった東方航路と新大陸の發見の齎したあらゆる果實、殊にその莫大な富の流入や政治的經濟的活動範圍の急激な擴大の結果を獨占して、物質面から見ても精神面から見ても、近代ヨーロッパの主導者たるに相應わしすべての條件を兼ね備えているように見えた。事實はしかしスペインは、それらの貴重な國家的資源、國民的活力の何れをも活用し育成する術を知らず、その力のすべてを空しく、フランスやイギリスを相手とする古臭いヨーロッパ覇權の爭奪や、カトリック教會の忠實な守護者としての努力に浪費して、既に十六世紀の末には急速な疲弊の淵に沈んで行くのである。そして皮肉にも、この巨人國家の極めて小さな屬領であるネーデルランドの、そのまた北半部の小天地に據って、獨立の反旗を揚

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

げたオランダが、——勿論最初は前記三強國の勢力の角逐が生む交互的抑制作用に助けられて、僅にその存立を闘い得たという有様ではあったが、——間もなく本國の落勢と反比例にその國力を充實して、近鄰のバルチック諸國はもとより、やがてはイギリス、フランスにも屹抗し、むしろ、その海上の覇權掌握によって、却て一步をそれらに先んずるほどの強大國として現われてくるのである。吾々の問題とする時代のヨーロッパの形勢は、確かにオランダをその中樞として回轉する。

ところが一見してこのオランダの文化には、その後のヨーロッパ文化發展の主流を形づくる國々、イギリスやフランスのそれとは大いに異った特色が、むしろそれらに對して對立的ともいふべき特色が附隨しているように思われる。吾々が觀察している時代は、イギリスでもフランスでも、近代的中央集權國家、國民的統一國家が、その仕上げの最後の試煉を経過する時期であつて、やがてその中から、フランスでは王權と官僚組織で組立てられた一君萬民の專制國家が、そしてイギリスでも、議會制度を基本とする一層民主的な方向に於てではあるが、

しかし同様に王權と内閣を中心とする中央集権的國民國家が成立するのである。しかるに、オランダ共和國は極度に地方分權的な國家で、イギリスやフランスでは今や全くその獨立の地位を失った諸州、都市、貴族的な小領主や或は農民的な地方團體までが、夫々獨立の主權的地位と意思とを以て、聯盟して構成する國であつた。獨立戰爭の初期には、その議員は一定の割宛てで各州から選任派遣されるのであるが、全體としては各州から獨立の意思決定機關として活動する *Staatstijf* が、重要國務について中央の最高主權を遂行するのにつれ、次第にその地位を制限され、休戦期に入ると各州に陸軍用軍事費を割宛て、これを徴収する事務以上の權限を全く失つて了う。中央國家、*Staten General* は國家の名はあつても、その實は、各州から派遣される任意数の代表員の協議體にすぎず、しかも代表員は協議に當つて、自己獨自の意見によって發言する權限をもたず、専らその委任者たる州の意思に従つてのみ發言することが許される。その決議 *Resolutien* は國の名で布告されるが、改めて各

州の議會がこれを可決した時にだけ效力を發する。各州の獨立主權に對して、それは全く強制力を缺いていた。各州の議會とても同様に、州内の夫々獨立の主權者である——或はそう自任し主張する——團體の代表員の協議體以上のものではない。ブルグンド公家以來、そのような地方團體の獨立的地位を一層大きな政體の中に統合しようとした努力が猶未完成であつた上に、革命と獨立、國家的舊領主權の排除が、それらあらゆる分權的團體を中世的獨立の地位に押戻したのである。ホーランドやゼーランドのように、大多數の代表員が都市を代表する州では、猶何らか統一的意思に到達し得る。しかし他の州では、夫々異つた利害と傳統をもつ都市や貴族や貴族に率いられる地方團體が夫々前の *Quasiest* として對立し、相争う有様である。共和國憲法の基本として認められたウトレヒト同盟憲章の九條は、講和、宣戰、休戦や課税等の國家重要な事項については、すべての州の全員一致の同意がなければこれを行ない得ないことを定める。それは國家の重要な意思決定の所在が、この中央國家にはなく、むしろ各州にあることの明かな表白で、勿論

それは近代的國家に適合した體制では到底あり得ない。それは國家構成員の夫々が、自己の自由と獨立を主張する中世的體制である。勿論共和國が近代國家群の一員として、しかも列強中の中樞として、國內國外の諸關係に對處しつゝ成長して行くためには、そのような中世的原理そのまゝでやって行けようはずはない、そこに吾々の觀察する時代のオランダがその解決を課せられた問題があつたわけであり、そしてオランダはこの問題を、イギリスやフランスとは大に異つた特色を以て解決する、少くとも解決しようと努力するのである。

經濟文化の面から見れば、吾々の觀察する時代が、イギリスに於てもフランスに於ても、所謂マーカンティリズムの盛期に當ることは、何人も知るところである。勿論マーカンティリズムというような概念の内容は、學者の見る所により、これを用いる場合によつて、必ずしも一様ではあり得ないわけではあるが、彼の生時に自國のマーカンティリズムの實際を直接に經驗し、最初にこの言葉を出したアダム・スミスによれば、商業主義或はマーカンティル・システムには二つの經濟的意欲が土臺

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

となつてゐる。その一つは、直接の貨幣引留め政策によつて、或は貿易尻、輸出入差額の考慮という迂回的な道を取らうと、何れにせよ國民經濟の目標として國民の貨幣收入の増加、國內の貨幣貴金屬の保有高の増加をめざすという點であり、他は、以上の目的を達する手段として、他國商品の輸入を防ぎ、自國の生産物の輸出を獎勵する、一步を進めれば、自國の産業を保護助長し、これと競争する他國のそのの繁榮を妨礙することが必要であり、そしてこのためには、國家は各種の施策によつて國民の經濟に干渉しなければならぬとする點である。

さてこの第一の經濟意欲或は經濟目標についていえば、それは、貨幣或は貴金屬は眞の富ではない、むしろ國民が實際に消費し生活に役立てることの出来る財こそ眞の富であるという、スミスの極めて當然自明な、ドクトリネールな批評によつて片付けられる問題ではないようである。むしろ問題は、スミスが國民經濟という限定された基盤の上に立つて、國民の生産力の増強が眞の國富の増強であると考えるのに對して、マーカンティリス

いうトーマス・マンの書名をそのまゝその經濟的格言として信奉している輩とミスが嘲けるマーカンテイリストは、——むしろ無限定に各地各國に分散して既に存する生産力の上に、それらの生産物を彼此融通する商業取引によって、貨幣的利益を得、從てまた財的富を増大しようとするという立場の對立にあつたのである。さて吾々の觀察に立返つていえば、オランダの國民經濟の指導目標がトーマス・マンと同じ立場の商業主義におかれていたことは疑がない。オランダ國民こそ當時の世界の唯一の海上運送業者であり、各國の物資の最大の仲介商人であり、そしてそのような活動によって、それは何人の眼にも疑いのないあの富と繁榮とを獲得したのである。States-generalの「一六四五年の Plakat」は、この國の全生活とその繁榮又共和國の名聲は一にかゝつて航海業海上商業にある、と公言する。その當時マーカンテイリストの有力分子である外國貿易商人のみでなく、指導的人士や爲政者までが、イギリス、フランスに於て、同じような思想を懷き、同じような經濟的意欲に基づく行動や政策をとつたとすれば、それには、彼等の眼前に赫々

たる成果を約束するような手本、模範として立ちはだかるオランダの經濟の影響が、彼等の上に強く作用したのではなからうかという推測が自ずから浮んで來るし、また當時の文獻にこれを裏書きするようなものが甚だ多いのである。その限りオランダも、イギリスもまたコルベル時代のフランスも、等しく商業主義を信奉する。

ところが、前述のマーカンテイリスムの第二の目標になると、話が大いに違つて來る。佛國の商業は商人達の利害關係の問題ではなく、むしろ國王の問題である、と考ふるコルベルにとって、商業もまた國民經濟全體の中での、その統一的基盤の上での問題であり、全體の利益に仕えるための手段であり、そのようなものとして、國民經濟の擁護者としての國家の手によって、統制され干渉されるのは當然のことであつた。——勿論これと並んで國家的統制や干渉の動機として作用する *Fiscale* 目的、國王や政府の財政收入増徴の動機は、多少の差はあれ、當時のオランダにもイギリスにもフランスにも同様に見られるのであり、その限り、今論外とする。——イギリスに於ても、フランスに於ける程露骨ではない

が、そのマーカンテイリズムが國民經濟的基盤の上に、その助長擁護をめざして主張されたことは、スミスの言を俟たず、明かである。それは、オランダの經濟的發展によつて、イギリスの國民經濟が受けている不當の侵害から、イギリスを解放しなければならぬ。イギリス國民はオランダの經濟支配に反抗して自國の經濟を防禦しなければならぬというような議論の中で殊に明瞭に表れて來る。英國領海での漁業は英國國民に對する天與の恩恵であり、従つてオランダ漁夫の獨占を禁止し、彼等の手から、これを奪回しなければならぬ。オランダ海運業の獨占的海上支配は、事英國の輸出入商業に關する限り、英國國民の活動の侵害であるから、航海條令によつてこれを排除し、英國國民の海運業を保護しなければならぬ。英國毛織物の染色加工がオランダで行われるのも、同様の理由から、未染色織物の輸出禁止等の手段によつて防禦されなければならない。等々。そのような國家的干涉政策によつて、國民の生産諸力を糾合し、指導して、一體としての英國國民經濟を築き上げ、その繁榮を育成しようというのが、この第二の意味のマーカンテイリズム

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

の目標であつたのである。近代的國家意識のめざめと共に、國民經濟として限定された共同利害の意識にも漸く目覺めた英國國民が、あまねく世界の、従つてまたイギリス國民の經濟に侵入し活動するオランダの勢力に反撥し、これに抵抗するところから、主としてそのマーカンテイリズムの精神が振り興されるのである。そこにも――勿論逆效果の意味に於てであるが――オランダの手本の強力な影響力を認めざるを得ない。イギリス、フランスのマーカンテイリストはこの點、彼等への反對者スミスやケネーと全く同じに、國民國家を背景とし、そこに限定され統一された國民生産力を基盤とした經濟を意欲するものであつた。

前述のようにオランダはこの國民國家的背景を殆んどといつてよい程もたなかつた。當然にまたその經濟への意欲に於ても、統一され限定された國民經濟への考慮も殆んどこれを缺いている。オランダ國民は各々その好むところに従つて、無限定に自由に、その經濟を營むことが出來、出來なければならぬ。商業の自由、あの分散と不統一の代名詞である自由主義がオランダ經濟の不可

侵の原理である。中央國家は國民の經濟に何等干渉しないし、また干渉し得る組織権限をもたない。國民經濟的或は一步を進めて國民國家的利害の觀念が甚だ薄いのが、當時のオランダの特色である。十七世紀の中葉、オランダ人の中では最も國民經濟的立場の強い理論家ド・ラ・クルルが商業はオランダの工業の繁榮に貢獻することを論ずる。しかしそれは商業の副次的利益を列擧する域を多く出ない。オランダ商業が國民勞働の生産力の基礎として尊重されねばならぬというような議論がオランダ論客の間から出るのは十八世紀も後半、既にアダム・スミスと同じ時代、オランダ經濟がその本來の特色を失った時代になつての事である。十七世紀のオランダ人にとっては何處であれ商業的利益の存するところ、そこが彼等の天地であつた。政府は國家が敵國スペイン、ポルトガル或はその屬領である南ネーデルランドと通商することに便宜を供し、オランダ商人は敵國に食糧軍需品殊に直接の戦闘力である武器を供給して憚らない。東印度會社や西印度會社はオランダの數少い國民經濟的企業である。しかるに自國のそれらの企業でその得意の地位

を得損つた有力商人達は、意識的にその成長を妨害しようとするばかりか、スウェーデン、イギリス等の植民地會社に、策を獻じ資本を獻じて、自國のそれに對する競争者を援助する。スペインとの戦争際中、オランダの商船を拿捕奪略してその海運業を妨害しようとする敵領ダンキルクの海賊に、投資するのを憚らないアムステルダム商人がある。

中央集權國家、統制された國民經濟、それらは政治經濟的な國民諸力を中央の國家の意思と權力によつて統一しようとする一つの形式意思の現れである。そしてオランダはそのような形式意思をもたず、その國家的經濟的形式は、イギリス、フランスのそれと大に異つていた。そのような觀察を経て、さて眼を精神文化の領域に轉ずると、そこでも吾々は同じような特色の相違をオランダとその他の國の文化の間に、見出すのである。十六世紀の後半から十七世紀にかけてヨーロッパの精神を支配する主導的傾向、指導の様式は所謂 Barok である。藝術に例をとれば、それはそれ自體必ずしも調和しない造型的諸要素諸力を、強い統一意思と力によつて、規制し、

一つの全體的表現として、形式的に統一しようとする運動である。大まかに云えば、中世紀の精神文化は、藝術に於ける Gothic、思想に於ける Scholastic、その他何れもカトリック教會中心の厳格な固定的形式によって束縛されていた。中世末近代初頭の文藝復興や宗教改革は夫、精神をそのような固定形式の束縛から解放し、自然奔放な生々とした世俗的宗教的精神を自由に活動させて、さてその中から、新しい精神的あり方、その可能な形式を探求しようとする運動と見ることが出来る。しかし、そのようにして自由を回復した精神が、一時代にわたって、奔放に夫々その好む方向に向って飛躍し亂舞したあとに、今や再び、精神をそのような個性的解放から取鎮めて、遵法的統一へ連れ戻さねばならぬという要求が起つて来る。文藝復興期を特色づけた囚われたところのない清新活潑な現實生活のよろこび、自由の中に看取される自然や精神の諸力の自ずからな形式的調和の發見、それらの代りに今や再び、調和や統一は権力的な意思によって遂行され、精神は、そのような意思とその形式的統一に自己を強制することに喜びを感じるようになる。

レムブラント時代とその社會經濟的背景(一)

る。素朴な現實からの高踏的超越、超越的な意思とその威嚴を表現しようとする志向、莊大な構想、重々しく威壓的な表現、それらがバロックの特色である。そのような様式が主として需要された王侯の宮廷や反宗教改革的な教會の雰圍氣がそこにあり、そこからまた、國家や經濟の面について前述したあの形式的特色とこの精神的様式との間に、何か内面的關聯の存在を思わせるものがある。

しかるに同じ時代のオランダ精神の表現は、丁度反對に、莊重嚴格な様式の缺乏、屢々極めて常識的ともいってよい現實の生活世界を對象として、これをありのままに忠實に描寫することに對する喜びに於てその特色を示す。彼等の尊ぶのは高遠な思想や莊嚴雄大な構想ではなく、むしろ日常生活での快感や有益性に役立ち、作者の手工業的熟練を證明するようなものが尊ばれる。後述のようにレムブラントやフォンデルのような天才的例外は別として、フランツ・ハルスの肖像畫を始め、當時のオランダ派の風景畫、風俗畫がこれを證明し、又ホーランド州の第一政務官であり富豪であり詩人であるヤコブ・

キャッツの大衆的教訓詩を始め、常識的な學者であるコンスタンティン・ホイヘンスの詩文、日常生活と密接に接觸するブレデローの喜劇等が同じくこれを證明する。ヨーロッパの他の國々でバロックが主導的である時、オランダの精神は明瞭に反バロック的特色を示すのである。オランダ文化の歴史的經歷、社會的事情を顧みるこゝとによって、それらの特色の由來する根據やその特殊の意味を理解し、オランダ文化の歴史的地位を定める上に幾分の貢獻をしたというのが以下の吾々の課題である。吾々は先ずオランダの經濟事情から觀察を始めよう。

三

レムブラント時代のオランダは、その領域ほど現在の王國のそれと同じく、その大きさはおよそわが四國の四分の三に當る。しかもその南部一帯の地域、北ブラバント、リンブルグ、シエルデ下流のフランドルを含む地帯は、一六〇〇年以後に共和國が攻略併合した地域で、その後も長く共和國の直管地であり、例えば關稅の關係で

は全く外國扱いであるという風に、本來の自治七州とは別の特別地區である。七州の中でも、東北隅二州グロニンゲン（或はフロニンゲン）、フリースラントは地勢も社會構成も、むしろ地續きのドイツに類する農業地帯で都市は少く、東部二州オーバー・イーセル、ゲルダールランドも同様に小地方都市が農村的地方や小さな領主貴族の勢力に對抗するような地帯で、共にオランダ本來の經濟に貢獻することは少ない。勿論それらの地帯にも舊ハンザ的中小商業都市は分布するが、ハンザ衰退の波に押流されて、この世紀にはそれらの都市の商業活動も次第に不振となるのである。残る三州中ウトレヒトはホーランド州と常に行動を共にするが、經濟的には東部二州と大差なく、結局ゼーランド、及びホーランド、北海に面する一帯の海岸州が新興オランダの經濟の基盤と見るべきで、その中でもホーランド州の重要さが斷然壓倒的である。こう見るとあの華華しいオランダ經濟も實は主として僅々百平方哩餘の狭小な地域の上に立脚するということになる。その上この州はその位置はネーデルラントの西北の邊境であり、地勢は大河のデルタや海濱か

ら成り、當然に鑛産物林産物等の資源の缺乏は云うに及ばず、海上の漁獲物や不毛地濕地を利用した牧畜の産物を除いては、農産物すら充分ではない。そのような經濟的繁榮に最も不適當と思われる地帯が、不思議にも中世の後期から次第に經濟的繁榮の度を加え、更に十六世紀末以後急激な發展によって、一擧に世界の經濟の中心點と見られるようになるのである。

そのような發展の基盤は、何人の眼にも明かなように、先ず第一にその海洋との密接な關聯によって與えられる。ゾイダーゼーや西方沿海の漁業に加えて、就中英蘭兩國の間に横たわる海洋が早くから著名な鯨漁場で、しかもオランダの漁業がこれに對して殆んど獨占的な地位をもっていた。そのような遠洋漁業が海上を怖れぬ船員を養成し、またこれに適當な船舶建造の技術を生み、それらの船と船員とを以てやがて漁業以外の航海、海上の運送や商業に乗り出す風を作る。同時に中世の末以來この地方に各種の産業が外國から輸入されてくる。例えばドイツからビール醸造業が傳わり、南方ネーデルラント當時世界的商業の中心地帯からも、そこで興る各種

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

の産業が、殊に毛織物を中心とする織物業やその關聯産業が流入して、その結果は人口も増加し、この海岸地帯が、今日見るように、都市に都市がつづく地帯となる。人口を養う穀物、更には諸産業の原料、例えば醸造用の麥や、建築用、造船用の木材、織物用の毛、絹等は勿論外國から輸入する他はない。前述の海上運送業海上商業勃興の氣運と、そのような産業事情が丁度結合して、十四世紀には既に、ゼーランド、ホーランドは海上的勢力の有力な根據地として人々の眼にもうつるようになる。その後もそれは、一方スペイン領ネーデルランドの一翼として、その廣大な國家が地理的發見の上に展開する商業擴大の利益にあずかり、他方またバルティック商業路の南端に位いするその立地的長所を利用して、ハンザの勢力に半ば従い半ば對抗し乍ら、オランダの商船はこの海域に着々としてその地歩を伸してゆく。けれど一時代前にこの海域の商業權を確立したハンザの先進都市は、既に功成り名遂げた心境に安住し、その商業的特權に頼るのに慣れて、既に進取の氣性を失う、自市の城壁の内に安坐して唯彼等の特權を保全することのみ汲汲とす

る時、新興のオランダの商人や船乗りは、困難を辭せず危険を怖れず、自らバルティック海の隅々まで、その物資の原産地にまで直接乗出して、その買付運送に當り、自國他國の商品の供給に當るからである。ホーランド州の都市は、一般的に見て、ハンザの都市——その中にはグローニンゲンやドルドレヒトのようなオランダ都市も含めて、——に比べ、あの中世都市の特權に染習する風が少い。それには今言つた老大の都市と新進のその精神の活力の相違ということも關係しよう。また前述したようにホーランドの經濟的繁榮がその諸都市によつて營まれる諸産業、港灣都市の海上商業や産業都市の輸出品工業や、それら都市の需要にもとづく食糧原料の輸入商業やの綜合的結果であること、即ちそれらの都市は共同の利害に結ばれ一群として共同の繁榮を擔うのであつて、ハンザ都市のように同種の經濟活動に於て各都市互に競争するという關係が薄かつたこともこれにあづかつているように思われる。都市都市によつて多少の差はあるが、ホーランド州都市が早くからこの地域的共同利益の觀念に慣れ、それによつてまた比較的に經濟的自由の

風格をもつていたことは充分注意する必要がある。

しかし十六世紀の中葉までのそのような發展は次の時代の大發展に比べれば、一つの準備期にすぎない。それは當時世界的な商業の中心地であつた南ネーデルランドの繁榮に遠く及ばず、それら都市群の代表者である阿姆斯特ダムすら猶二流の商業都市にすぎなかつたのである。そして、ライデンのそれを始めとしてそれら都市の産業殊に織物工業が同じ十六世紀の半ばに顯著な凋落の狀態を示すことから見ると、中世末以來の發展が當時漸くその限界に達しようとしていたと見られなくもないのである。

十六世紀の末から十七世紀にかけての大發展の契機はむしろ新らたに外からこれに加わるのである。これについて述べるに先だつて一言この當時の經濟的繁榮のあり方について注意を加えて置くのが適當のように思われる。

近代の諸國民經濟がその内包する全産業の生産力を基盤としてその上に立つということは、ミス、ケネー等の最初の經濟學以來の基本觀念であつて、事實、近代に

於ける經濟的發展、諸國民の經濟的勢力の消長が、國民の生産力の盛衰にかゝっていることは何人にも明かである。しかし中世末期から近代初頭にかけての時代について見れば、經濟的中心勢力の形成、そのような中心によつて主導される經濟の形式的な新發展は、むしろそれとは異なる關聯の中で起るように思われる。即ちそれはそのような中心點の限定された生産力的基盤に主としてかゝわるのではなく、無限定の廣い範圍に分散して存在する諸生産力の結果を集結したり、配分したりすると、各地各國の生産物や資本が國際的に流通しある特殊點に集中するという、主としては商業的關聯の中で起るのである。個々の地域の生産力はその中心點の繁榮を支えるのには足りない、しかしそれらの全體は屢々——特殊な中心點に於て——大きな富と繁榮を支えるようになる、とアダム・スミスが論ずるあの關聯である。商品や資本の國際的流通路、いわゆる商業路の要點に、商工業的繁榮の中心である都市或は都市群が成立し、その活潑な經濟的營みの間から、新しい經濟形式經濟技術が生み出され、新しい經濟的對象の發見や新領域の展開が見ら

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

れる。そのような大都市に集る富とそれによる豊富な生活、そこで養われる流動的精神が屢々また經濟以外の領域殊に精神的文化の領域に於ける新しい運動に力強い背景を與え、これを助成する。そのような現象は中世の末以來吾々が常に見るところである。南方には古代以來の古い地中海の商業路が、そして北方ではバルティック商業路が中世後期の世界的交通の幹線として榮え、更にライン、ドナウやその支流の水系を利用しながら、中東歐から黒海を結ぶ商業路や、アルプスの南北を連絡する交通路がこれに交錯する。南ではヴェネチアやフィレンツェを代表者とする伊太利の諸都市を中心として、南佛やカタロニアに至るまで多數の國際的商業都市が成立して、互にその繁榮を競い、北方ではあの大幹線に沿ってハンザの諸都市が西から東へ星のように並んで建設される。中世の末から近代の發端にかけて、中東歐の路線がニュールンベルグを中心に新しい活動に入ると、また新しい中心點が、當のニュールンベルグや、これに續くアウスブルグやライプツヒ等の商業都市に於て擡頭し、更には東方航路新大陸の發見によつて國際交通路が一躍

擴大されると、イタリヤやカタロニア等の地中海側の都市が衰退するのと反比例して、大西洋側のカディスや殊にリッサボンが世界の視聽を集めるようになる。近代資本主義と呼ばれる經濟體制の經濟的形式、その經營技術の多くが既に早くこれらの中心的國際商業都市に淵源することは疑うことの出来ない歴史的事實であり、そしてイタリヤや南ドイツの都市の繁榮が、文藝復興や宗教改革の精神的運動の有力な背景であったことも、誰でも知っていることである。

これらの國際的諸商業路が、四方から集り接觸連絡する地點を占めるのが南ネーデルランドで、十四世紀末まではブルージュを中心とするフランドル州の都市群が、そのような地の利に據って世界的中心市場として繁榮し、十五世紀中葉になると種々な事情から、この中心が北隣りのブラバント州の都市アントワープに移る。それと共に急激なこの都市の世界市場的繁榮が始まる。ブルージュ市場の繁榮を培った外國商人達が擧つてこの市に移る。殊に既に衰退期に入ったハンザやイタリヤ商人（ベネチア及びフィレンツェの商人）ばかりでなく、今

やその若々しい活動期に入ったばかりのイギリスや南ドイツやドイツ及び北ネーデルランドの北海諸市や就中またスペイン、ポルトガルの商人達までがここに集中することによって、それは眞に新しい時代の世界商業の中心點たる資格を備えるようになる。ルドヴィコ、グイッチアルディニはそのネーデルランド誌（一五六七年）の中で各種五百隻の船がその港に一日に出入する事を報じ、同じ頃のイギリスの一文書はアントワープ（人）がそれ以外の都市の商人達の商業を一手に併呑する勢を示すことを報ずる。委託問屋による取引範圍の擴大、取引所取引の發展、爲替信用の新技術や投機取引の方法の發見等それが近代資本主義的經濟の成立の上に齎す貢獻は大きい。しかしそれにもまして、アントワープが諸國の商人（Nations）に一視平等、自市の市民と同じ自由をほゞ無制限に許す點に、その近代經濟への親近性が感ぜられる。

しかるに十六世紀の後半、ネーデルランドがスペインの統治に叛いてこの地帯が動亂の巷となると、その商業を阻碍された外國商人達は次第に四圍の國と都市に散り

始め、一五七六年給料不拂を不満とするスペインの反亂兵によって、この市が破壊的略奪を受けると共に、さしも繁榮を極めたアントワープの商業も一舉に離散し、最後に一五八五年の市の陥落と、今やスペイン領となったアントワープに對する北ネーデルランド諸州の封鎖作戰によって、その市場としての地位が全く失われる。一五八一年に出たネーデルランド誌第二版の増補の中で、グイッチアルデニは、今日のアントワープの富を先の日（第一版當時の）それに比すれば、夜の晝に於けるが如しという。そして今やアムステルダムが突然眞晝の輝きの中に姿を現すのである。

アムステルダムもまた動亂の當初には商業途絶商人離散等の経験を餘儀なくされるが、既に八十年代には免許狀制度による敵國スペインとの通商再開、引つづくアルマダ艦隊の全滅等によって急速に立直りつゝある際に、南方からの避難商人多数を迎えることになつたのである。アントワープから四方に離散した商人達の多数が次第にホーランド諸都市、殊にアムステルダムに集まってくる。けだし舊ハンザの特權思想の強い都市、ドイツで

レムブランド時代とその社會經濟的背景（一）

はケルン、オランダでもドルドレヒト等は必ずしも好意を以て彼等を迎えないのに反して、前述のようにハンザ的慣習に慣れる事の少かつたホーランドの都市は、極めて寛大自由な態度を以て彼等を歡待するからである。世紀の中葉まで沈滞の淵に沈んでいたホーランド産業諸都市の工業が、移住新市民の南方から齎した新技術新經營の輸入によって急激に再興する。殊にアムステルダムは、大きな資本と豊富な世界商業的経験を携える新市民の刺激や活動の下に、急速度でアントワープの承繼者として世界商業の新しい中心市場にのし上るのである。バルチックやスペイン、ポルトガル向けの海上商業が活潑に再開される許りでなく、從來殆んどその國旗を翻したことのない地中海の商業路や更にはポルトガルの獨占權によって禁斷されていた東洋航路にまで、オランダ船隊は進出し、間もなくオランダの海上の支配權を確立して了うのである。一五九八年には保險登記所が、一六〇二年には東印度會社、事實上その後の株式會社の最初の手本であるこの會社が、一六〇八年—一一年には新築の取引所が、翌九年には後代の公立銀行の最初の手本と

もいうべき爲替銀行が、創設される、という風なめまぐるしさがその經濟の突然の新發展と勃興とを物語る。一六一六年には穀物取引所が、一六二一年には西印度會社の夫々その設立を見る。一五六七年から八五年に至る間のアムステルダム的人口はほゞ三萬と推定し得る。しかるに一六二二年には既に十萬五千、レムブラントがこの市に畫業を開く一六三一年の前年には、十一萬五千を越え、彼がこの世を去る頃七十年代の始めには、人口二十萬を越える大都市に成長する。その富力について見ても同様に、一五八五年の財産税に關する報告は、當時のアムステルダム商人の富がさほど大きくなかつた事を示している。しかるに、一六三一年の 200 Penning — 家計狀態や財産の査定を基礎に課税される財産税——の納税者帳簿によれば、當時アムステルダムの人口十一萬二萬の中、九八人が十萬フロリン以上（最高はポッペン家の一員の五十萬フロリン）の財産を所有し、二一八人が五—十萬、五八四人が二—五萬フロリンを有し、約六三四—萬フロリンと見積られる私有財産評價額の三分の二が約千人餘の富者の手にある。一六七四年の同じ財

産税の帳簿によれば、レムブラントの友人で援助者でもあつたベーター・シクストが六五萬フロリンを有し、その他四〇萬フロリン以上の富者一人、二〇萬—四〇萬の所有者五六人、その中にはレムブラントの「解剖の圖」によつて吾々に親しい外科醫ニコラス・トゥルブもその名を列ねる、一〇萬—二〇萬の所有者一四四人であり、それ以下でしかも當時としては相當な財産家である者の數は更に大いに増加している。

吾々は今やオランダの經濟、殊にホーランド州のそれが、十六世紀末からの一世代にあれ程急激に勃興する理由を諒解することが出来る。それはオランダ自體の生産力が變化したとか、オランダ人が新しい經濟形式、例えば國民經濟というような新しい經濟のあり方にめざめ、意欲し、これを實現したとかいう理由によるのではなく、全く歴史的な事件、世界の經濟的繁榮の中心點の移動という事實の上にあるのである。オランダ經濟の主導的原理は、アントワープ市場のそれと全く同じで、無限定な世界の各地各國に成立し存在する生産力の上に、その物資を融通し、この流通を仲介する商業であり、國民

經濟というような形式的限定、そこから自ずから發生する構成的統一的意思を、共に知らぬという意味の經濟的自由である。勿論、たゞそのような歴史的影響を受け入れ、アントワープの遺産を承継いだということだけでは、オランダのあの大きな發展は起らなかったであろう。このような歴史的影響、アントワープ商人の移住は、イギリスでもフランスでも、殊にドイツの諸都市就中ケルンなどでは顯著に見られる。しかし、そこでは何等オランダのそれに比べるような發展は見られなかった。アントワープの承繼者たるホーランド諸都市殊に阿姆斯特ダムは、これまでの發展に更に新しい發展を加えたし、加える力をもっていた。そこに、十七世紀オランダ經濟を考察する場合の第一の問題點がある。更にホーランド總じてはオランダの經濟が、國民經濟的意欲をもたなかったにしても、それが置かれた十七世紀の形勢の中では、即ちイギリス、フランスを始め、北歐の諸小國に至るまで何れも國民經濟的に自己を限定し、同時に自己の擴大的形成を欲する運動に主精力を注ぎ、互に相對抗する形勢の中に置かれては、オランダと雖も同じ方

レムブラント時代とその社會經濟的背景(一)

向に押流され、同じ問題性に當面せざるを得ない。この問題を彼等が如何に解決し、或は解決しようと努力したかが、十七世紀のオランダ經濟の性格を考察する場合の第二の着眼點であろう。勿論そのような點を、それ自體問題として、詳細に論證することは今この場合には不適當である。吾々はたゞその要點だけを極めて略筆的に述べるので満足しなればならない。

十七世紀のオランダの經濟の中樞的性格は、以上の敘述によって明かなように、中世後期以來ヨーロッパ各地に成立し、次第にその所在を推移して行く世界的商業市場、世界的繁榮の中心都市の經濟をその中樞とすることである。勿論他の多くのそのような中心都市の例と同じく、ここでも商業の繁榮に伴って、各種のその他の産業、殊に輸入原料に加工して、製品を再び輸出するような工業が起るのは自然の勢である。ホーランド州諸都市の在來の工業が、この時代に強力に復活することは前述した。しかし更に重要なのは、新奇な、在來の手工業的組合の統制に束縛されぬような種類の工業の多數が、今や技術の輸入や原料入手路、製品販路の擴大の便宜の上

に、續々と起つて來、在來の工業でも、新技術新品種の導入や商業資本による生産規模の擴大を見る場合には、屢々手工業的束縛を破り、時にはそのような束縛にも拘らず、急激な發展をすることである。アムステルダムの砂糖精製業、シーダムの火酒製造業や、その他製油、石鹼の製造、タバコ、製鹽業等の新産業の成立や、在來の造船業、醸造業殊に織物業及びその關聯産業の勃興等がこれである。しかし、そのような工業的生産力が、あの繁榮の主たる原動力でないことは、ホーランドの大商人達によって好んで企業化される乾拓事業と、これによる農業生産力の増加がそうでないのと同じである。それらは商業や、商業による資本増加の隨伴的結果であつて、決してその原因ではない。少くとも人々はそのような國內生産力の増加を、國民經濟的立場から意圖し評價するのではない。オランダの商業にとって、安價に商品が入手し得る限り、その生産地が自國であると同國であると問う所でない。オランダの資本は、自國産業にも、他國産業にも等しく供給される。例えばイタリヤ、フランスの絹原料は、アムステルダム市場で容易に長期の信用を

與えられ、これは惹いて、アムステルダムの絹織物業がその原料を安價に入手することを妨害するのである。

オランダ經濟のヨーロッパの經濟發展に對する貢獻は、それ故に、主としてその商業、殊にアムステルダムの市場に於けるそれが生み出す新しい營利經濟的形式や取引技術に於て見られる。それが資本主義的經濟の先進者として、後代に及ぼす影響の中に求められねばならない。そのような眼を以て吾々がこの市場を觀察する時、しかし、そこに見出される多くのものは、吾々の以前の敘述から當然推測し得られるように、この市場で始めて發見されたものではなかつた。それらは既に早く世界各地の同様な世界商業的中心都市の中で次第に成立し慣行され、そして直接には、アントワープの市場から、今やアムステルダムへと承け繼がれたものであることに氣付くのである。十七世紀にアムステルダムの商業の内容充實を助ける各種の制度や施設、委託問屋や仲買人や、取引所や保險業務や、送金殊に信用手段としての爲替の使用等々は、何れも既にアントワープ市場で知られたところのものであつた。既に早くからアントワープでもアム

ステルダムでも、私的兩替人や、この業務に關聯して商人の預金支拂の勘定やその帳簿上の決済を代行する *Bankiers* が知られていた。それは通貨の不完全やその種類の複雑さから自ずから成立したものであった。兩替銀行は本来、それらの業者の増加とこれに伴う弊害を、——例えば *Passet* が委託された勘定残高を浮貸しするというような弊害を——防ぐ爲に、彼等の機能を公正統一的に果す公的機關として設けられたもので、本質的に何等新しいものではない。しかし、例えばアントワープに於ては猶賭けごとの性質を脱し切れない保険取引が、次第にこの市場では正常な且重要な商業行爲に成長するようになり、或は前記の兩替銀行が次第に、少くとも重要高額の取引については、劃一的にして且額面通りの通貨——但し銀行の帳簿上の振替決済に於てのみ用いられる計算上の貨幣、實體のない *Banccgeld* の形に於てではあったが——を市場に提供する公的施設として、後代の諸國公立銀行の重要な手本となるように、それらの形式、技術はこの市場で、次第に普及し、精煉され、意味上の發展を遂げるのである。いやそればかりではなく、そこに

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

は今迄知られなかつた新形式新技術の發展もまた見られるのである。

その第一は、周知の通り、東西兩印度會社が代表するような、新しい資本形成の方法としての株式會社制度の出現である。勿論兩會社のそれと今日の株式會社の制度の間には猶雲泥の相違がある。東印度會社の前身である諸會社、例えば第一回の *Co. van Verre* の組織は、今日吾々が知り得る限りでは、會社企業と *Commenda* の複合體で、持分船主として會社を構成する九人の大商人の夫々の下には、匿名組合的にこれに出資した他の多數の商人達が附隨する。このようにして、恐らく専ら事業遂行の衝に當つた前者と、利益分配を待つだけであつた後者の間には、始めからその權限性質を分ける一線が劃されていたように思われる。このような事情と直接關係するか否かは、もとより不明であるが、それらの各個會社の大同團結によつて、統一的獨占的東印度會社が成立した時、國民はその額の大小を論ぜず等しく新會社に資本参加を許される立前ではあつたが、事實は従前から船主として事業に當つていた少數者、*Directoren* は容易

くはその地位を他人に譲ろうとしない。Bewindhebber 即ち大投資者であり、特別に保證金や誓約の義務を負う少数の會社理事者と一般株主との間には、性質上の相違があり、両者は全く連絡のない別趣の投資者として對立することとなった。この表面民主的な資本形成の組織と、實質上寡頭政治的な會社經營の組織との矛盾をめぐる争いの間に、その後の東印度會社の組織の問題が發展してゆく。一六二二年、一六四七年と特許状更改の度毎に一般株主の民主化的攻勢は少しずつ効果を奏するように見える。しかし事實はそれらも殆んど實效なく、十七世紀の後半には會社の寡頭政治的組織は確固として確立して下う。理事の任命權がその Kammer 所在市の市長にあるという制度、そこから由來する、都市の政權をとる一團の有力な商人家族が、またこの唯一國民的事業の經營權を獨占してしまふという事情の中には、後に述べるようなオランダの全經濟界の組織形態の特色と、相通する特色が示されている。

兩印度會社の出現はしかし別の方面でもアムステルダム市場に重要な影響を及ぼす、即ちその取引所に於ける

株式取引の發展がそれである。アムステルダム取引所では、別の取引所で行われる穀物取引、保險登記所で行われる保險の取引を除き、商品も證券もサービスも共に取引されるのであるが、アントワープであれ程榮えた國債の取引は、一六七二年、佛軍の侵入による危急存亡の際に、軍費調達のため共和國が國債の市場賣出しを行うまでは、殆んど行われなないで、代りに兩會社の株式が證券市場の主な取引對象となつたのである。もとよりこの取引も、最初は持株の額面の大小不揃いなことや、取引決濟の中央機關の不備等、今日のそれに比べてさまざまの機構的不便に悩まされるのであるが、次第にその中で形式に於ても技術に於ても新しい進展が起つてくる。世紀後半のこの取引所の事情に精通したロベツ・ド・ラ・ヴェガによれば、取引所の客には、價格の如何を問うことなく株式自體に興味をもつ「殿方」と、その賣買によつて價格差額を手を収める事をめざす「商人」と、更に「賭博者」があるという。この後二者によつて營まれる投機取引が、特にこの期間に發展する。將來の株價について自ずから市場に「弱氣」「強氣」が発生し、彼等の各

々が買買價格の差額をめざして勝負するための定期取引が行われるようになる。世紀の後半になると仕法も次第に整備されてくる。買手は通常 *regiment* と呼ばれる買買單位——レギメントは十萬デューカーテン以上の高額である——で、受渡月の二十日を定期に買約し、期日に利または損失を以て轉賣するか、價格の五分の四に對する繰越料（日歩）を拂込んで、清算を將來に繰越すか、或は銀行を通して價格を支拂い、株式の名義を書替える。そのようにして清算取引、買買差金の獲得だけを目的とする取引が、次第に正常な取引形式として發達してくる。既にアントワープの市場でも、*Option* 取引、*Premium* 取引が知られていた。それは一定のプレミアムを豫め拂うことによつて、取引契約の期日に於ける履行不履行を選択する権利を保留した取引であつて、一種の賭博であり、そのようなものとして繰返し禁止されており、事實それはアントワープでは猶未だ正常普通の取引方法にまで成長していなかった。しかるにそれが今やここでは、表向きの禁止にも拘らず、日常の取引の方法として行われるようになり、同時に取引に投機的要素を

ルムプラント時代とその社會經濟的背景（一）

加えるようになるのである。

十七世紀の後半以來、商品取引についても清算取引的定期取引の方法が用いられてくる。ここでは從來から行われる實物取引の一種である先物取引と本来の定期取引とを區別することがやゝ困難であるが、恐らく證券に於いての仕法が商品取引にも普及したものと見ることが出来る。この他にも同様の新現象として、例えば十七世紀以來オランダで起る北洋捕鯨に關聯して行われる捕鯨業者のカルテル——所謂 *Nordische Kompagnie*——をもここに擧げる事が出来る。絹物業、香水製造、煉瓦業についてもカルテル結成の事實が知られている。カルテルと市場獨占の現象についても、決してオランダがその始めであるというわけではないが、しかし、そのような近代的現象を既にここに見ること自體が、オランダ經濟の發展と近代資本主義經濟との間の密接な關聯を證明するものである。

アムステルダム或は一般にオランダの經濟とアントワープのそれとを比較して氣付く最も大きな相違は、しかし、もっと一般的な態度、或は精神もしくは氣風といつ

にも、これに對抗しなければならなくなる。オランダもまた國民經濟的對抗の形勢に、自ずからまき込まれずにはいらなかつたのである。紙面も既に盡きたので極めて簡単にいえば、そのような對抗の間にも、オランダはしかし、その都市經濟的經歷からこれに附隨したあの經濟意欲、經濟體制を、——即ち分散的自治的體制、各都市各地方の *particularism* と、無限定無統一の象徴であるあの經濟的自由放任の精神とを、——決して棄てないのである。唯、その置かれた地位、それが課せられた任務から、統一的協力の體制、國民經濟的考え方が要求されて來ると、そのような新しい課題を舊來の體制や考え方の上に立ちながら、解決しようと努力するのである。

先にも云つたように、オランダでは各州各都市それぞれ自主獨立の地位をもつのであるが、十七世紀の經濟的勃興は、それらの中の一州ホーランド州に、殊にその中心都市アムステルダムに拔群の優越的地位を與えるようになった。ネーデルランド共和國という國名の代りに、早くからホーランドなる州名が代用されるという事情、ホーランド州の *Lan Desadvokat* ——一六二一年以來は

レムブラント時代とその社會經濟的背景 (一)

Ratpenionar ——即ちこの州の政府の第一政務官が外國との交渉に於て常に共和國を代表する事情、それらはこの州の優越を示す最も見易い象徴である。そしてそのような優越の基礎がこの州殊にその都市アムステルダムの經濟的繁榮とその培う富力にあった事も疑いのないことである。それは共和國の國費の半ば以上を獨力で支辨し、従つてその發言力の大きいのも當然である。都市の中では、先に東印度會社の組織について見たと同じ現象、即ち少數の有力市民、所謂 *Patriziatfamilien* が一團をなして市政を獨占し、強固な支配的階級として一般市民に對立する。それらの大部は大商人家族或はその出身者であつて、吾々の時代には、猶日常商業に携わる者であつた。彼等は互に他市のそれと利害を争い、あの分散主義を助長するようであるが、一旦共同の利害に——例えば *Stathalter* オラニエン家を中心とする國家主義的君主的勢力との對抗のような——當面すれば、勿論アムステルダムの有力市民を中心にまた一團の勢力を形成する。このように見えてくると、ドルドレヒトの大商人の出身で、ホーランドの *Grand Pensionar* であつた

ハン・デ・ウィットに率いられた十七世紀中葉のオランダ共和国の經濟體制は、ホーランド州殊にアムステルダムの主導的大商人階級のそれ、彼等の經濟意欲によって指導的に統一される、少くとも代表されていると見ることが出来る。多元的分散的な各分子を、その中の一つの斷然他を壓倒するような勢力と大きさによって同一行動の方向へ指導調整する。このようなものが十七世紀オランダの國民國家的國民經濟的體制構成の基礎であった。

アムステルダムの大商人を中心とする主導的階級の經濟意欲は、吾々が既に度々見た通りあの分散的無統一の經濟自由へのそれである。如何にもオランダはこれによってあの商業的偉大さを達成したのであるが、しかしそれが内面的原理的な一貫性を缺き、自己に都合のよい限りの、利己的自由主義であった限り、それはやがて彼等の偉大さを損い、その永續を困難ならしめるようになる。オランダ人は、スペイン、ポルトガルが世界の海洋を不當に獨占し、自國領土視するのに對して、先にグロティウスの海洋自由論を以て抵抗した。しかるに、彼等が東洋航路の主人となると、東方の海上權を永く東印度

會社の獨占の下に守ることが、彼等の中心的願いとなる。彼等は自ら商業の自由を要求し、その利益を他人に説き乍ら、彼等の最も怖れるのは、南方ネーデルランドの競争者アントワープが復活しその商業の自由を回復することであった。彼等はアントワープの水路シェルデを封鎖し、この市の商業を永久に窒息させるために最大の努力を傾けるのである。ホーランドの諸都市は一方自由商業によって繁榮を獲ち得ながら、他方その市の手工業的生産については中世の組合的統制を永く存続させ、また周圍の田舎が、同じ生産に従事する事を頑に拒絶する。そしてそのような工業生産の自由化が齎したであろう利益を自ら失う。オランダの工業の疲弊の大きな理由がまさにそこにあつたのである。そのような無定見な利己主義は、本來中世以來の都市の自由の考え方に内在していたものともいえるし、また他方からいえば、各人、各身分が夫々獨立に自己の利益を主張するあの分散的組織の一結果現象であるともいえるのであるが、何れにせよ、それは、新しいオランダ國民の國民經濟的形成をそこから期待し、他の國々のそれに對抗する立場をこれに

よって固めるに足るものではなかった。但しイギリスやフランスの國民經濟的攻勢と壓迫の下に苦闘するウィットや、彼の思想的代辯者であつたペーター・ド・ラ・クルヤの思想行動の中には、そのような傳統的考え方に新しい意味を興え、從來の立場から一步を進める努力が何か認められるように思われる。ド・ラ・クルは恐らく當時のオランダで唯一の完全な自由主義者で、あらゆる統制制限は必然に經濟的惡であり、經濟的利益を害するものと信ずる。彼はこの考えから東西兩印度會社のような、國民擧つて容認する國策會社の獨占性にも敢然と反對する。デ・ウィットが、イギリスやフランスとの經濟戰爭が遂に抑止し切れなくなるその直前まで、國々相互の商業自由の利益を相手國に説き、互惠的通商條約の網によつて、國際的自由商業の場を確立しようとし、また確立し得ることを信賴し、戰爭切迫の情勢に當面しても軍備よりはむしろ利子切下げによる商業振興にその注意を集中するというような行動の中には、一國の爲政者の行動としての是非の判断は別として、何か國民經濟的形成の新しい可能性へのひたむきな努力が感じられる。

レムブランド時代とその社會經濟的背景(一)

しかし、そのような努力は失敗しそして無效であつた。ウィッレム三世、ウィッレム四世と共に Stadtholder の勢力が再び擡頭し次で確立する十七世紀末から十八世紀にかけて、オランダの國民經濟的反省が一層強く盛上つてくる時、その主導的思想は既に明らかにイギリスやフランスのそれに學び、これに影響されたもの、即ちそれらの國々のマーカンティリズムのひそみに倣うものであつた。國內産業保護が要求され、そのための保護關稅政策の必要が主張される。それはオランダ独自の立場から出發せず、この頃から誰の眼にも明瞭となる商業の衰退、その國民的經濟力の退歩を防ぐ上にも何等見るべき場を擧げることが出来なかつた。オランダは独自の形式による、その國民經濟樹立に遂に成功しなかつた。しかしそれはイギリスやフランスがその國民經濟的體制を形成する上に直接間接の、積極的或は逆效果的な重要な影響を及ぼしている。オランダ經濟は都市の經濟から國民のそれへの過渡時代であつたという、既に少からぬ學者の述べる意見に、自分もそれが以上のような意味で理解される限り 賛成する。(一橋大學教授)